

和田家

和田家は白川郷にある 100 以上の合掌造りの建物の中でも、最も大きくて有名なものです。江戸時代（1603～1867 年）後期に建てられたこの家は、何世紀にもわたってこの地域で最も裕福かつ影響力の合った和田氏の富と権力を反映しています。この一族は江戸時代を通して庄屋の地位を保持し、白川郷の北端でこの地域を出入りする人や物の流れを規制していた政府の検問所を監督しました。和田氏は、始めは焰硝（火薬に不可欠な原料の硝酸カリウム）の生産と取引で、1800 年代後半からは養蚕によって大きな富を蓄えました。1889 年には和田家の当主が、現代の白川村の初代村長に任命されました。

3 階建ての和田家の一部は今でも住居として使われていますが、大部分の部屋と広々とした屋根裏部屋が一般に公開されています。建物はある程度改修されているものの、訪問者は白川郷の最盛期に裕福な家族がどのように暮らしていたか感じることができます。家の正面に向き合うと、2 つの入り口があることに気づきます。右側の小さい方が住人用でした。一方、左側の大きい扉は 2 つの畳敷きの部屋につながっており、政府の役人など重要な客のためにのみ開けられました。白川郷でそのような入り口を持つ建物は和田家のみであり、同家の高い地位を物語っています。

この住居の 1 階には中央に伝統的な囲炉裏があり、食器類や調理器具など日常生活で使われていた品物が展示されています。凝った装飾の大きな仏壇もあります。多層式の屋根裏部屋には道具類や器具類が展示され、この家の屋根がどのように茅葺きされているのか説明しています。訪問客は、藁縄とマンサクの若枝で作られた結束部品（ネソ）だけを使って固定されている屋根の構造の内側を、間近で見することもできます。重要文化財に指定されている家屋に加え、和田家の敷地内には隣接した庭と池、著しく大きな離れ家（お手洗い）、および裏の耐火倉庫（蔵）などもあります。